

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 8 日現在

機関番号：34315

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2013～2014

課題番号：25885104

研究課題名(和文) 大学生の学習ダイナミクスと結びついたキャリア形成に関する理論的・実証的研究

研究課題名(英文) A study on undergraduate students career development in connection with learning dynamics

研究代表者

河井 亨(KAWAI, Toru)

立命館大学・教育開発推進機構・嘱託講師

研究者番号：20706626

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、大学生の学びと成長における研究知見の蓄積のために、大学生の学習ダイナミクスと結びついたキャリア形成に関する理論的・実証的研究を体系的に進めることを主たる目的とする。本研究の理論研究では、大学生の成長について、認知的・認識論的成長と対自的・对人的(対他的)成長とが相同な構造で理論化されていることを明らかにしてきた。本研究の調査研究では、大学生の学習に関する時間的展望が将来・現在・過去からなること、将来の側面だけでなく現在・過去の側面にも着目する必要があること、そして自己省察によって将来・現在・過去の学習に関する時間的展望を形成していくことが実践的課題であることを明らかにしてきた。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to systematically investigate the relationships between learning and career development of undergraduate students. By theoretical review, It was found that cognitive and epistemological development is a central issue in student development and consists of the view of knowledge, the definition of a situation, and involvement in the knowledge-construction process. This kind of development is also parallel to intrapersonal and interpersonal development. Through a survey of students' time perspective on learning (TPL), I found four aspects: Future Perspective on Learning, Satisfaction in Present Learning, Exploration and Anxiety about Future Learning, and Dissatisfaction about Past Learning. Student development was supported not only by future perspectives but also by past and present perspectives. For student development is the construction of their own future, present, and past TPL through self-reflection.

研究分野：社会科学

キーワード：大学教育学 大学生学習論 学習とキャリア形成の関係構造 大学生の成長理論 学習に関する時間的展望

1. 研究開始当初の背景

近年、大学教育改革への社会的期待は高まりを見せている。中でも、「学生の学びと成長」というテーマが大学教育研究の重要課題となっている(京都大学高等教育研究開発推進センター 2012; 中央教育審議会答申 2008, 2012)。「学生の学びと成長」は、20 世紀半ばより、国際的にも、日本社会においても大きな関心が向けられている(溝上 2012)日本においても、意味のある教育改革・教育改善のために、「学生の学びと成長」に関する調査データに基づく体系的な研究が求められている(山田編 2011)。

こうした背景のもと、大学教育研究において、大学生の授業内外の学習ダイナミクス(河井 2012; 河井・溝上 2011, 2012)大学生の授業での学び、アクティブラーニング型授業での学び、ピア・サポート、キャリア意識といった多岐にわたるテーマに対して徐々に研究が蓄積されてきつつあった。しかしながら、これまでの研究では、学生の「学び」に焦点化してきたものの、「成長」について十分に探究していないという課題が残されていた。また、「学び」と「成長」の関係構造についても、調査研究・理論研究が十分に進められてはいなかった。

2. 研究の目的

そこで本研究では、大学生の成長とはどのようなものかを明らかにすることを1つの目的とした。また、大学生の成長の1つの側面として、キャリア形成が想定される。国内外で、大学教育におけるキャリア研究は蓄積されていた(児美川 2011; Coll & Zegwaard 2011; 日本キャリア教育学会 2008; 梅崎・田澤 2013; 吉本 2012 等)。その中で、効力感と展望を軸とする学生のキャリア形成の姿が明らかにされてきている(Raelin et al. 2011; 溝上他 2012)。そこで本研究では、これまでの研究をキャリア研究の蓄積と接続し、理論研究と調査研究の双方から学生の学びがどのようにキャリア形成に結びついていくかを明らかにすることをもう1つの目的とした。

3. 研究の方法

大学生の成長とはどのようなものかを明らかにするという第一の目的に対しては、理論研究として進めることとした。具体的には、大学生の成長理論を広くカバーしている N. J. Evans らの Student Development in College というハンドブックを中心に大学生の成長理論をレビューしていくこととした。また、大学生の授業内外にわたる学習ダイナミクスについての研究を大学生の学びと成長というテーマのもとで総括的に捉え直していく作業を進めることとした。

大学生の学びがどのようにキャリア形成に結びついていくのかという第2の目的に対しては、調査研究によって取り組むこととし

た。大学生を対象とした調査研究では、キャリア形成についての研究の中で、キャリア形成に重要な影響を及ぼすとされている時間的展望の概念に着目した。キャリア形成についての研究の中では、時間的展望の形成がキャリア形成につながるとされている。時間的展望は生活や人生全体に関わる構成概念として概念化されている。大学生の在学中に、自らの学びをキャリア形成につなげていくという文脈に落とし込むと、全体的な時間的展望ではなく学習という活動に特化した時間的展望、すなわち「学習に関する時間的展望」が問題になると考えることができる。そこで、大学生の学習に関する時間的展望に関する調査研究を進めることとした。

4. 研究成果

平成 25 年度と 26 年度を通じて、1960 年代以降の大学生の成長理論の文献研究を行った。一貫して、大学生の成長の中核に据えられているものは、アカデミックな知識のような対象との関係における認知的成長であった。大学生は、認知的に、二元論・多元性・関連主義・コミットメントという認知的・認識論的成長を遂げていく。そして、相同な構造で、対他関係における社会的成長と対自関係における人格的成長を遂げていくと理論的展開を見せていることも明らかにされた。これらの文献の日本の大学教育研究への体系的な紹介はこれまでなされておらず、今後の「学生の学びと成長」研究にとっての踏み台となると考えられる。この研究成果は、『京都大学高等教育研究紀要』に掲載された。

また、大学生の学びと成長という視点から、これまで進めていた大学生の授業内外(正課・課外)にわたる学習ダイナミクスについての調査研究をまとめあげる作業を行った。第1に、大学生が、授業外での活動の実践コミュニティにおいて学習に取り組み、正課・課外を往還する中で、授業の中での学習と結びつけて統合することが可能である点が調査研究を通じて明らかにされていった。このような学習ダイナミクスをラーニング・ブリッジングとして概念化された(河井 2012; 河井・溝上 2011, 2012)。第2に、このようなラーニング・ブリッジングの土台として学生の自己アイデンティティ形成が見いだされると同時に、ラーニング・ブリッジングを通じて自己アイデンティティ形成が進められるという学びと成長の相互関係が見いだされた。以上を踏まえて、第3に、学習と成長の相互関係の具体的なあり方として、正課・課外にわたる学習ダイナミクスとしてのラーニング・ブリッジングと自己アイデンティティ形成との相互関係が提示された。さらに、第4に、ラーニング・ブリッジングと自己アイデンティティ形

成の相互関係大学教育全体の目標である「自分に対する教育を自分で編成していく力と責任を学生たちに与えていくこと」(松下2003: 79-80)に対する学生の応答の形として捉えることができると提起された。そして、そうした教えることと学ぶことの関係が、大学という場のオートノミーの実践的核心である。以上の理論的総合は、『大学生の学習ダイナミクス 授業内外のラーニング・ブリッジング』(東信堂)においてまとめられた。

平成25年度と26年度を通じて、学びと成長の関係構造として、学習に関する時間的展望に関する調査研究を行った。対象と方法は、各学年515人の計2060人のオンライン調査である。学習に関する時間的展望は「将来に向けた学習展望」「現在の学習の充実」「将来に向けた学習の模索・不安」「過去の学習の未充足」という要素からなることが明らかにされた。これらの要素をもとに学生を類型化して検討したところ、将来の学習展望を形成している学生類型が、学習行動の面でもキャリア形成の面でも高いパフォーマンスを示すことが明らかになった。また、「将来に向けた学習の模索・不安」は学生に広く見られる側面であることが明らかになった。そして、学年で言うと、2年生時に、学習に関する時間的展望の揺らぎが見られることも明らかになった。これらの結果から、将来の学習に関する時間的展望を形成するだけでなく(またはそれを形成するためにも)、現在とそこにつながる過去の学習に関する時間的展望の役割に目を向ける必要性が示された。実践的には、実際に日々の学習に取り組んでいくことはもちろんのこと、その学習への意味づけという自己省察が課題として明確になった。

本研究計画の柱は、大学生の成長をどのように捉えることができるかを理論的に明確にすることと学習がキャリア形成とどのように関連しているかを明らかにすることであった。本研究の結果は、大学生の成長を漠然とひとくくりにして議論するのではなく、成長の側面を分節化して構造的に把握することを可能にした点に意義がある。また、学習に関する時間的展望の実態把握が進められた点と自己省察を通じた将来・現在・過去の関連づけの必要性という実践的示唆が得られた点にも意義がある。大学生の学びと成長というテーマは、時代的にも社会的にも重要な研究課題であり、今回の研究活動スタート支援での研究蓄積をもとに、理論研究と調査研究を前進させる作業を現在進めている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計8件)

山口洋典・河井亨・桑名恵・川中大輔

(2015). 地域参加を促す系統的な履修プログラムの体系化の方途. 立命館高等教育研究, 15, 129-144, 査読有.

酒井淳平・河井亨 (2015). 高等学校におけるキャリア教育授業の実践による生徒の変容 「将来の見通し」に注目して. 立命館高等教育研究, 15, 145-160, 査読有.

木村充・河井亨 (2015). サービス・ラーニングにおけるチームワークが学生の学習成果に及ぼす影響. ボランティア学研究, 15, 87-97, 査読有.

Kawai, T., & Kimura, M. (2014). A Study on the Role of Reflection and Bridge Learning in Service-Learning : Through the Survey of the "Community Service Learning" Course at Ritsumeikan University. Educational Technology Research, 37(1・2), 15-23, 査読有.

河井亨 (2014). 大学生の成長理論の検討 : Student Development in College を中心に. 京都大学高等教育研究, (20), 49-61, 査読有.

河井亨・溝上慎一 (2014). 大学生の学習に関する時間的展望 : 学生の学習とキャリア形成の関係構造. 大学教育学会誌, 36(1), 133-142, 査読有.

Kawai, T., Torii, T., Kawanabe, T., & Ishimoto, Y. (2013) The Examination of Institutional Research through the Lens of Action Research Focusing on the IR Project at the institute for the Teaching and Learning at Ritsumeikan University. Advanced Applied Informatics (IIAIAAI), 2013 IIAI International Conference on IEEE. 403-404, 2013, 査読有.

Kawai, T. & Mizokami, S. (2013) Analysis of Bridge Learning Focus on the Relationship between Bridge Learning, Approach to Learning, and the Connection of Present and Future Life. Educational Technology Research, 36(1・2), 23-31, 査読有.

〔学会発表〕(計5件)

岩井雪乃・兵藤智佳・本間知佐子・和栗百恵・河井亨. 体験を社会の中に文脈化して学びの意欲につなげる-早稲田大学「体験の言語化」科目の開発, 第21回大学教育研究フォーラム, 京都大学(京都府・京都市), 2015年3月13-14日

川那部隆司・河井亨・鳥居朋子・辰野有・今川新悟. 教学IRにおいて正課教育と課外活動とをどのようにつなぐか?-正課と課外の関連性に関する学生の認識に着目して- 第21回大学教育

研究フォーラム，京都大学(京都府・京都市)，2015年3月13・14日

山口洋典・堀江未来・桑名恵・坂田謙司・河井亨．PBLにおける実践評価と教育評価-立命館大学 OAK プロジェクトの試み．第21回大学教育研究フォーラム，京都大学(京都府・京都市)，2015年3月13・14日

河井亨．高等教育におけるプロジェクト型教育実践の類型についての考察，第30回日本教育工学会全国大会，岐阜大学(岐阜県・岐阜市)，2014年9月19-21日

河井亨．大学生の「学習に関する時間的展望」についての調査研究-学習成果との関連の検討，第36回大学教育学会，名古屋大学(愛知県・名古屋市)，2014年5月31日-6月1日

〔図書〕(計2件)

河井亨 「大学生生活と仕事生活の実態を探る」中原淳・溝上慎一編『活躍する組織人の探究 大学から企業へのトランジション』東京大学出版会，2014，192(73-90)

河井亨 『大学生の学習ダイナミクス 授業内外のラーニング・ブリッジング』東信堂，2014，294

6．研究組織

(1)研究代表者

河井亨 (KAWAI TORU)

立命館大学・教育開発推進機構・嘱託講師

研究者番号：20706626